

平成 27 年 2 月 27 日

学位（博士・言語教育学）審査論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 ズビアシビリ タマリ 学生番号 1D502


〈論文題名〉 グルジア語を母語とする日本語学習者に於ける  
長母音の習得について


—VT法による発音指導—

Acquisition of the Japanese long Vowels by Georgian Learners :  
Pronunciation Guidance by Verbo-Tonal (VT) Method

審査委員

主査 外国語学部教授 木村 政康 

副査 外国語学部教授 小林 孝郎 

副査 外国語学部教授 安富 雄平 

## 学歴

氏名	ズビアシビリ・タマリ		
所属大学・研究科	拓殖大学・言語教育研究科		
大学	1996年7月	トビリシアジア・アフリカ大学国際交流学部	卒業
大学院	2009年4月	拓殖大学大学院言語教育研究科	日本語教育学専攻 博士前期課程 入学
	2011年3月	拓殖大学大学院言語教育研究科	日本語教育学専攻 博士前期課程 修了 取得学位：修士
	2011年4月	拓殖大学大学院言語教育研究科	日本語教育学専攻 博士後期課程 入学
	2014年3月	拓殖大学大学院言語教育研究科	日本語教育学専攻 博士後期課程満期退学 取得学位：博士（見込み）

## 職歴

1997年9月—2006年12月	トビリシアジア・アフリカ大学日本語教師
2000年8月—2006年12月	トビリシ日本センター理事事務長（NGO）（ボランティア）

## 研究業績

2001年12月	「日本語とグルジア語の受身表現について」 トビリシアジア・アフリカ大学紀要
2004年9月	『みんなの日本語』、スリーエーネットワークーエーネットワーク、 「グルジア語文法解説」内容編集者
2010年7月	JAVET（日本言調聴覚論学会）研究大会発表（拓殖大学） 演題：「グルジア語の破裂音について」

- 2012年7月 JAVET（日本言調聴覚論学会）研究大会発表（館林市文化会館）  
演題：「グルジア人学習者の長音の生成について」
- 2012年9月 第二回南コーカサス日本語教育セミナー（トビリシ市自由大学）  
演題：「VT法の教え方について」
- 2012年12月 拓殖大学言語教育研究科博士後期課程中間発表会  
演題：「グルジア語を母語とする日本語学習者に於ける長母音の習得について ―VT法による発音指導―」（拓殖大学）
- 2013年9月 JAVET（日本言調聴覚論学会）研究大会発表（神戸市甲南大学）  
演題：「グルジア人学習者の日本語の特殊拍の習得について」

## I. 論文の主旨

グルジアトビリシ大学にて日本語指導をしてきたが、現地教育現場における音声指導の不備が感じられ、グルジア語と日本語の音韻構造の違いを対照言語学的観点から、実際の調査を通して分析し、その結果を基にVT法による発音指導を実施し、将来の音声教育に役立てることを目的としている。

具体的な調査、指導対象は、グルジア人日本語学習者における日本語の長母音（拗長母音）の聴取・生成の問題点であり、母語干渉による聴取・生成時の音声的誤用の傾向を明らかにすることができる。

調査語彙リスト作成に際しては、長母音が語頭、語中、語尾に位置し、アクセントピッチの高低、また放出音が現れやすい音環境を選定するなど、聴取・生成の全体構造的な傾向を見るものである。こういった、語彙リストを作成することにより、個別言語特有（グルジア語）の母語干渉や他の言語にも共通する特徴が見出せると思われる。

調査結果を分析し、その結果を、音声指導に役立てるため、オーディオリンガルメソッドに基づく指導法、VT法に基づく指導法の2つのグループに分けて音声指導を実施し、VT法の音声指導法としての優位性を実証する。

## II. 論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

### 目次

1章 序論	1
1.1. はじめに	1
1.2. 言語リズム	2
1.3. 研究目的	5
1.4. 発音教育の現状	6
1.5. 発音教育の方法	7
1.6. 日本語及びグルジア語のリズム	9
1.6.1. リズム	9
1.6.2. 日本語のリズム	10

1. 6. 3. グルジア語のリズム	12
1. 6. 4. 考察	13
2章 先行研究	14
2. 1. 研究目的	14
2. 2. 先行研究	15
2. 2. 1. 母音の生成に関する研究	15
2. 2. 2. 長母音の知覚に関する研究	19
2. 3. 音声指導に関する研究	23
2. 4. 先行研究のまとめ	25
3章 研究方法	26
3. 1. 研究対象	26
3. 2. アンケート調査	26
3. 2. 1. 調査対象者	26
3. 2. 2. アンケート調査の結果	27
3. 3. 学習者の知覚能力の測定	28
3. 4. 評価方法	28
3. 5. 調査方法	28
3. 6. 学習者の知覚・生成能力の測定（2回目）	29
3. 8. 調査概要	29
3. 7. 1. 研究対象	29
3. 7. 2. 学習者の知覚能力の測定	30
3. 7. 3. 学習者の生成力の測定	30
3. 8. 聴取調査	31
3. 8. 1. 初級学習者における長母音聴取調査の結果	31
3. 8. 2. 初級学習者における拗長母音聴取調査の結果	31

3. 8. 3. 中級学習者における長母音聴取調査結果	32
3. 8. 4. 中級学習者における拗長母音聴取調査結果	33
3. 8. 5. 聴取調査結果の分析	34
3. 9. 初級・中級学習者における長母音・拗長母音生成調査結果	37
3. 9. 1. 長母音生成調査結果の分析	39
4章 VT法	41
4. 1. VT法の概要	41
4. 2. VT法による発音指導技術	44
4. 3. 緊張	51
5章 実験授業における発音指導	52
5. 1. 実験授業とVT法	52
5. 2. 実験教育概要	54
5. 3. 実験教育に於ける教材	55
5. 4. 長母音と誤用	55
5. 5. 長母音の指導	56
5. 5. 1. 長母音の指導内容	60
5. 6. 促音	65
5. 6. 1. グルジア人学習者の促音の問題点	66
5. 6. 2. VT法による促音の指導	67
5. 6. 3. 促音の指導内容(付録9)	69
5. 7. 撥音	70
5. 7. 1. グルジア人学習者の撥音の問題点	71
5. 7. 2. VT法による撥音の指導	72
5. 7. 3. 撥音の指導内容(付録10)	73
5. 8. 日本語及びグルジア語のアクセント	74

5. 8. 1. アクセントの誤用及び発音指導	76
5. 8. 2. アクセントの指導内容 (付録 11)	76
5. 9. 日本語とグルジア語の閉鎖音	77
5. 9. 1. 日本語の「k、t、p」の指導	80
5. 9. 2. 「k、t、p」の指導 (付録 12)	81
5. 10. 日本語の弾き音 /r/ とグルジア語の /r/	81
5. 10. 1. 「ラ」行音の指導	81
5. 10. 2. 「ラ行」の指導 (付録 13)	82
6章 誤用の改善率	83
6. 1. 長母音・拗長母音の聴取誤用の改善率	83
6. 2. 長母音・拗長母音の生成誤用の改善率	87
6. 3. 長母音・拗長母音の聴取・生成 2 回調査に於ける誤用の傾向	89
6. 4. 聴取、読み上げ実験の平均誤用改善率	90
7章 結論	91
7. 1. 結論	91
7. 2. 聴取調査の結果	91
7. 3. 生成調査の結果	92
7. 4. 指導の効果	92
7. 5. 終わりに	93
注釈	94
参考文献	95
付録	102

### III 本論文の概要

#### 1章 序論

筆者は、リズムの重要性という観点からグルジア人日本語学習者に対してアンケート調査を行った。その結果、日本語のリズムの一環と考えられている特殊拍の中で、長母音の聴取・生成が一番難しいという結果を得た。長母音の習得困難を明らかにした研究もあることから、研究対象を長母音にしぼっている。更に、拗長母音の習得が困難であるという記述も見受けられるが、研究としては不十分であり、本論では拗長母音も研究対象としている。

日本語のリズムは、モーラ・リズムとして分類されており、各モーラ（拍）がほぼ等時に発話されるという特徴を持っているのに対し、グルジア語は弱い強弱アクセントがあるため、音節リズム言語と分類されている（Howard I. Aronson）。ストレス言語より日本語に近い音節言語であるグルジア語を母語とする日本語学習者にとり長母音の聴取・生成は容易ではない。このことは、ストレス言語話者より音節言語話者の方が長母音に問題があったとする研究からも頷ける。

世界において日本語の発音教育が不十分であることは様々な文献に示されている。（小熊2002）では、日本語能力が上級になっても音声能力のレベルが低いことに関して「日本語教育においては一般に、学習者の発話をテストする機会が少なく、音声指導があまり行われていないのが現状である。そのため、文法や語彙など他の言語能力が上級レベルになっても、音声の習得が進まない学習者も見うけられる」と述べている。

グルジアの日本語教育に関しては、まず、日本語との対照研究が成されておらず、母語との相違点が教えられていない事であり、その結果、母語干渉に起因する音声的誤りの矯正も行われていないという現状である。筆者は、母語と同じレベルで自然に言語獲得ができる臨界期「11歳」（グベリナ1981）を超えている学習者には、理論知識と共に、母語干渉を乗り越えて音声の正しい聴取・生成を実現できる音声指導法を提案すべきであるとしている。その具体的方法としてVT法を取り上げ、実験教育において発音教育・矯正を行うとしている。単純な反復練習で退屈になりがちな発音授業（佐藤雅子2004）に遊戯性の要素を加えれば、リズム感が付き、日本語のリズム、イントネーションの学習効果が高まるとしている。

#### 2章 先行研究

##### 「長母音の生成に関する研究」

長母音生成に関する研究では、どのような音環境において誤用が生じやすいか、日本語運用能力別に差があるのか、学習者の言語による違いがあるのかを中心に先行研究を調査している。小熊（2008）は、長母音の自然発話スタイルに関する研究から、1. 中級レベルの学習者に短音の長音化の現象が起きる 2. 単語内の「語末」位置にある長音の方が、「語頭」位置より習得が困難である 3. 単語内の「語頭」の位置の短音が長音化しやすい。また、



日本語学習者の発話における間違いに言及し、1. 拍の増加とは、意図された言葉より実際の発話の方が長く知覚され、全体として拍が増えたように感じられた場合、2. 拍の減少とは逆に、音が短く知覚され拍数が減ったように感じられた場合、3. 拍の交替とは、理論上の拍数は同じであるが、拍を構成する音が変化したためリズムが乱れたように感じられた場合であるとしている。

栗原（2005）はレベル別の傾向、習得プロセスに関する産出実験を行ったが、日本語能力が低い場合は長音が短音になりやすく、日本語能力が高い場合は短音が長音になりやすいという傾向が示されたとしている。また、日本語学習の初期段階では短音が発音の基準になっており、学習が進むにつれて長音の持続時間が伸長していくとしている。

李炯宰（1997）では、長母音生成の過程は、まず短音生成が基準であり、学習が進むにつれて長音の生成も可能になっていくとしている。

室井（1995）では、単語の読み実験の結果、「語頭」位置の長音の産出が易しい、それから知覚より産出の方が難しいということが明らかになったとしている。

日本語能力レベル別の対照を行った研究として、長井（1997）は、初級学習者も上級学習者も、日本語母語話者も生成した単語の拍数と単語全体の物理的な長さに相関が認められたとしている。

戸田（1998）では、初級学習者は長音と短音の区別が曖昧であるが、長母音は学習レベルが上がると、母語話者の長さに近づいていくと述べている。また、1年間の縦断研究の結果として「母音の長短は、子音に先行して習得される」と報告し、また、時間制御は過剰般化→オーバーシュート→自己修正の過程をたどるという説を提唱している。

#### 「長母音の知覚に関する研究」

中川道子（2000）は、文に長音と短音を含む無意味語を挿入して実験を行ったが、短音化は、1. 第一音節より最終音節におこりやすい、2. 拗音は最終音節より第一音節に影響すると述べている。同様に、皆川・桐谷（1996）でも、日本語学習者の母語に関わらず、語末音節において誤聴が多い事が報告されている。

内田照久（1993）は、「北京標準語」を母語とする日本語学習者を対象に、発話速度の制御及び母音空間の伸縮に関して極限法を用いて聴解実験を行い、初級学習者は、かなり長い持続時間の母音でなければ長音と確定できないこと、上級学習者は典型的な長音があれば問題はないが、判断境界値も母語話者とは異なると述べている。

戸田（1998）は、縦断研究を通して、1. 日本語上級学習者は長音と短音の範疇化が初級より進んでいる。2. 上級者でも、先行母音の時間長による影響がない。3. 長音知覚は「目標設定・知覚範疇化・自己修正」という習得過程をたどるという説を展開している。

栗原（2004、2006）の研究では、学習者は知覚判断境界が明確ではなく、日本語母語話者より短い持続時間の刺激で長音を知覚し、母語話者が短音とするものを長音として知覚する場合があると指摘している。

嵐洋子（2012）の研究では、途中で下降のある音声の場合、中国語母語話者は短い持続時

間でも長母音と判断しやすい傾向が見られたとしている。

前川・助川（1995）では、ピッチ変動が長母音の知覚に影響を与えているとし、韓国のアクセント地域の話者の方が、長母音知覚判断がアクセントのピッチ変動によって影響を受けると判断している。

小熊（2000a）では、1. 長母音と短母音の知覚能力は、中級から上級にかけて有意に向上する。2. 中・上級学習者は、長母音を短母音と誤認識する傾向がある。3. 長母音のピッチの変化は、上級学習者による長母音の知覚判断に影響を与える。4. 単語内の長母音の位置による難易度は、難しい順に「語末>語中>語頭」位置、習得順序は逆に「語頭→語中→語末」位置の順である。5. 長母音のアクセント型による難易は、難しい順に「低低>高低>高高>低高」型、習得順序は逆に「低高→高低→高高→低高」型の順である、とした。

ガリエーゴ・ニーニャ（2012）のフィリピン人日本語初級学習者に対する知覚実験では、1. アクセント核と長母音位置が一等した場合、長母音の知覚判断が容易である。2. 語頭の長母音が聞き取りやすい3. フィリピン人日本語学習者は、長母音の知覚判断においてピッチ変動を音響的な要素として利用していると報告している。

大室他（1996）では、3種類の聴覚実験（1. 母音の長さの変化による実験 2. 母音連続による実験 3. 話速及びアクセント変化による実験）を行い、母語話者とは異なり、長音・短音の知覚判断において、長音部内のアクセントの高低変化は影響せず、母音の持続時間のみが影響するという調査結果を報告している。

学習者の母語の転移という観点から母語別に分析したものとしては、皆川・桐谷（1996）の研究がある。音節長の変動が小さい音節リズムの母語話者は、変動の大きいストレス・リズムの母語話者よりも音節の長さに鋭敏であるという予測に反して、音節長の変動が小さい母語話者が最も誤答率が高かったと報告している。

さらに皆川（1997）は、学習者の母語のリズムにより異なる時間制御の特徴が及ぼす影響を分析しており、モーラ・リズムの時間制御の特性により近い音節リズムの言語話者が、ストレス・リズムの言語話者よりも誤答率が低いのではないかという予想とは、逆の結果になったとし、リズムが長母音の知覚に影響を与えることは少ないとしている。

#### 「音声指導に関する研究」

音声指導に関しては、皆川（1995b）が長母音の知覚能力を測定する実験を行い、長母音の知覚能力が学習年数や音声に関する学習経験の有無とは相関性がないとしている。

鹿島（1995）は、学習者のインタビュー発話を評価の対象とした研究を行い、2短音節を一まとまりにしたリズム区切りをふまえたリズム教育が、特殊拍などの拍感覚の習得に効果があったと報告している。

横井（1998）は、学習者に発音の問題点を指摘しフィードバックさせたが、学習者はこの指導を肯定的に受け止めて、発音に対する意識も高まったが、長母音は改善率は低く習得が困難であったとしている。

川口(1984)は、VT法の発音指導技術の1つである「身体リズム運動」の効果を探っている。アクセントの転換点に長母音がある場合は、十分な長さの長母音が生成できるとし、特に、ピッチが上がる時の長母音は相対的に効果が高いとしている。これは手の運動による肉体的緊張度が・前音節の母音を一拍分伸ばすという時間的な緊張度と一致するためであると報告している。

小熊(2000c)では、読み発話形式における長母音と短母音の産出能力に関して、初級学習者を音声指導の有無により2つのグループに分け、1か月ごとに4回の音声資料を収集し、その間の成績変化の考察を行っている。当然の結果であるが、指導を行ったグループのみ成績が向上したことがわかった。また、全体に長母音を産出する成績が向上したのに対して、短母音の産出は母音が長母音化される現象が見られ成績が下がる傾向があった。これは、長音という母語にはない概念を留意しすぎて短母音の母音の短さに対する注意が低下したことによる結果ではないかと報告している。

#### 「先行研究のまとめ」

長母音の生成、知覚、音声教育に関する先行研究にみられる特徴、傾向を箇条書きにしてまとめている。

- ①先行研究で扱っている発話スタイルは、単語及び短文読み上げ実験がほとんどで、自然発話における長母音産出に関する研究は少ない。
- ②母語別の傾向に基づく研究がみられた。
- ③学習者が話す中間言語における、共通の長母音習得のプロセス「過剰般化→オーバーシュート→自己修正」に関する研究がみられた(戸田1997)。
- ④単語内の位置は、語末長音が困難であることを明らかにした研究があった。
- ⑤語中の長母音の研究が非常に少ない。また、実験対象は初級、上級、超上級学習者が多く、中級学習者を扱っている研究が少ない。
- ⑥学習者の日本語能力レベルが上がるとともに、長母音の発音には自然さが増すという、学習レベルによる傾向を研究したものが多い。
- ⑦長母音の学習過程を明らかにした長母音の知覚・産出・指導に関する縦断研究が少ない。
- ⑧長母音の産出及び指導に関する研究は、長母音の知覚に関する研究より少ない。
- ⑨従来の指導方法は聞き取りと繰り返しの方法が多く、学習者へのフィードバックが不十分であり、指導法についても具体的な技術が記述されていない。
- ⑩長母音の習得はほかの項目に比べ困難であり、遅れていることが先行研究で示された。

以上、10項目に特徴と傾向をまとめている。自然発話における長母音産出に関する研究、及び長母音の習得法に関する研究が少なく、今後の課題と言えるであろうとしている。

### 3) 研究方法

#### 「アンケート調査」

聴取・生成調査の前にアンケート調査を行っている。アンケート調査の対象になる被験

者は、トビリシ自由大学及びトビリシ大学の日本語能力が初級・中級の 2 レベルの学習者である。初級学習者は自由大学 10 名、トビリシ大学では 13 名、そして中級学習者は自由大学の 15 名であった。年齢は 17 歳から 23 歳、首都トビリシ市内在住である。生育環境は、両親ともにグルジア語母語話者で、グルジア語を母語とし言語形成期をグルジアで過ごしている。また、日本語教員は全員グルジア人である。

アンケートを通して分かったことは、両大学とも発音の特別練習及び母語との相違点は説明されておらず、体系的に発音教育が行なわれていないことであった。初級学習者 (95.7%) より中級学習者 (86.7%) の方に誤用が多いのは、五十音を学習してから、発音にそれほど注意を払わなくなったことが原因ではないかとしている。

#### 「知覚能力の測定」

次に、聴き取りテストによる知覚能力の測定を行った。語彙リストは、長母音・拗長母音の単語内の位置（語頭、語中、語末）を考慮し、アクセント型は日本語で最も多い頭高型と平板型にしたとしている。結果の評価は、東京在住の 30 代女性にお願いしている。テスト問題は語彙の聞き取りで、まず、長母音を含む単語を提示し、次に長母音のない単語が続く。長母音を含む語は 30 語、拗長母音を含む語は 30 語、長母音がない語は 58 語、全部で 118 有意義語であった。語彙リストは、単語内の音節位置（語頭、語中、語末）とアクセント型により作成している。アクセント型は、最も多い頭高型と平板型を中心にし、長母音部のアクセントは「高低」「高高」「低低」「低高」の全種類とした。長母音に注意を向けさせないために、単に発音をチェックするだけであると伝えた。1 回聞かせ、そして聞き取れない場合は手を挙げるように指示し、最大 3 回繰り返したとしている。

#### 「学習者の生成力の測定」

語彙の読み上げテストは、長母音を含む語は初級 47 語、中級 40 語であり、拗長母音を含む語は初級 24 語、中級 29 語であった。2 大学ともアクセントを教えていないため、アクセント型は考慮せず、語中の長母音のみに焦点を絞っている。単語の振り仮名が読めない学習もいると予測し、単語リストを渡してから 5～10 分程度の準備時間を与えている。

#### 「聴解調査」

Dickerson, L. (1975) の研究では、第二言語の音声変異について、変異をもたらす 3 つの要因、1. 目標音の音声環境 2. 発話スタイル 3. 学習者の学習歴をあげているが、筆者は、第 4 の要因として学習者の母語干渉という観点からも考察を行っている。グルジア語を母語とする学習者を研究の対象にすることによって、言語の普遍的な特徴および言語の個別的な特徴を明らかにすることができるとし、その調査結果を考慮し、VT 法による音矯正を行い、その効果に関して論じている。

#### 「長母音の聴取調査」

調査では、語中の長母音（低低・高低）が一番難しいという結果であった。これは、「長音部の末部の音が低い、すなわち語中の長音（低低・高低）型は、長音として知覚されにくい」という先行研究に通じるものであり、また、長音部のアクセント型が「低低」型で

は、ほかの型と比べて有意に誤答率が高い結果となったとしている。ピッチの高い音は長く聞こえるという音響心理学的な要因（小熊 2008）が誤用の原因にはないかとしている。また、「低低型」長母音の知覚が困難なのは、言語の普遍的特徴であると同時に、どの段階においても困難な型である可能性が高く、「低低型」は知覚されにくいという傾向は、日本語学習者全般に共通しているとしている。

語頭で比較的誤答率が低い理由として、語末における音自体の高さと強さの減衰、また、語頭から語末にかけて緊張度が減少するという緊張の性質も音の知覚に関係しているとしている。

語末の生成は困難であるという先行研究（小熊 2008）、李炯宰(1997)、土屋順一（1992）があるように本調査でも同様の結果となったとし、音声は語末に向かうほど、エネルギーが減少するという普遍的な事実が、調査結果にも現れたとしている。また、語頭から語末へ単語の緊張度が減少するという VT 法の考え方は、語末で長母音・拗長母音の誤答率が高くなったという結果を支持するものであるとしている。

#### 4章 VT法

VT法は、発音の習得を言語の全体構造の枠組みで捉える視点を持つ点でユニークである。つまり、リズム、イントネーションと短音の発声に厳密な関係があると主張している指導法である。また、緊張という概念を導入し、学習者の誤用を緊張の観点から分析し、フィードバックができる指導法である。筆者は、実験授業において身体リズム運動、わらべうた、ログトムをその指導テクニックとして導入しており、その特徴に関して以下のように解説している。

##### ①身体リズム運動

身体リズム運動は身体とリズムの厳密な関係に基づく技術である。クロード・ロベルシュ（1985）は身体リズム運動の特質について下記の3点に分けて説明している。

1. 緊張を調音器官だけでなく、体全体で感じさせる。
2. 単音の持続時間、手の動きによって調節できる
3. 調音方法を部分的に手の動きによって視覚化できる。

##### ②歌（わらべうた）

ペタル・グベリナ（1981）は、リズム、ハーモニー、イントネーションがたくさんある歌によってリズムはより強調され、また体もよりリズムカルに動くので、歌は発音の獲得の助けになると述べている。筆者は教師という経験を通して、歌は文化の一部であり、そして遊戯性のある歌を授業に取り入れることにより、単調で退屈になりがちな発音の授業が楽しくなり、学習者の学習意欲も高まったとしている。わらべうたリズムには、昔から歌い継がれてきた「伝承わらべうた」と、「伝承わらべうた」で補いきれない音声要素を、最適なりズムに乗せて作成する「創作わらべうた」を活用したものがある。

##### ③ログトム（無意味音節）

目標音を、または聴取・生成しやすい「タ」をリズムに乗せ、繰り返すことで、習得しやすくなるという考えが基礎になっている。

#### ④緊張

緊張（緊張性）はユギ・ゴスポドネティッチにより提案された概念であり、VT法に於いては、発音矯正・指導の基盤となっている。正常な話者においては、サーボ機構の要因（運動感覚・聴覚・自己摂受体に関するもの）を媒介として相互に刺激し合う条件反射として考えられるべきものであると、また、緊張を知覚する調音器官を2つに分け、一つは調音に関わっている軟口蓋前方、もう一つは発声、音質に関与している軟口蓋後方であるとしている。緊張は、単音とプロソディが言語音の要素として相互に関与し合う過程で、直接介入し、言語音を完成された構造体へと作り上げる役割を担っているとしている。

### 5章 実験授業における発音指導

グベリナ(1981)は、臨界期（11歳～12歳）を超えた子供の脳、大人の脳は自然に言語獲得ができないと述べており、VT法による母語干渉を排除して適切な発音を誘導する指導法を提唱している。更に筆者は大人の脳は子供より分析的であることを利用し、VT法による教育と理論教育を組み合わせることを試みた。筆者の提案する感覚機能を活用した教育法と日本語音声の特徴を理論的に解説する教育法を組み合わせることは、大人を対象とした発音指導では、音声学習へのモチベーションが上がり、必ずしも矛盾するものではないと考えるとしている。

小熊(2000c)は、長母音の誤用にはアクセント、破裂音、拗音等の誤用が関わっており、長母音だけに注意を向けさせると、母語にはない「長音」という概念を留意しすぎて「短音」の持続時間の短さに対する注意力が低下する可能性があり、拍感覚や典型的な誤りがみられる発音の指導を併せて行ったとしているが、ここでは長母音指導のみを概要する。

#### 「実験教育概要」

対象は自由大学の1年生で、10人のうち5人を指導群に、残り5人を非指導群に分け、指導前と指導後の両方において長音調査を行っている。指導グループではVT法による長音、リズムの指導を1か月半にわたり、週に1回、各回1時間ほどの頻度で行った。全部で6回の指導となった。

#### 「実験教育に於ける教材」

1. 対象となる2言語の音声的相違点についてシートを作成して学習者に配布。
2. 調音点や調音方法の教示と、ログトム、創作わらべ歌、歌、身体リズム運動を用い教材作成。
3. ログトム及び拍リズムトレーニング等を載せている「やさしい日本語発音トレーニング」の音声及び練習文の一部を使用した。

#### 「長母音の指導内容」

(クロード・ロベルシュ、木村1990)で解説されている長母音の指導法に基づき以下の

ように指導を行ったとしている。

長音の指導は4回行い、その内容について解説している。

#### 1回目長母音指導（付録5）

長母音及び特殊拍、拍等に関する理論的な説明をしてから練習に入った。拍感覚を習得させるための練習である。

練習は9回で、身体と調音器官の緊張度を利用した、身体リズム運動とログトムを併用している。

#### 2回目長母音指導（付録6）

練習は7回で、上記と同様、ログトムを提示し、長母音の身ぶりに乗せて練習を行っている。ログトムは、聴解で誤答率が低かった語頭位置の「おおきな」、「きょうしつ」、「きょうかしよ」を用いて練習を行っている。次に、児童の歌「お正月」を用いて拗長母音を中心に練習し、最後は会話文の聞き取り練習を行ったとしている。

#### 3回目長母音指導

練習は5回で、語中の長母音のログトムを導入し、身ぶりを併用しながら4拍リズムで練習している。指導項目は「どようび」、「のろう」、「じどうしゃ」であった。長音部のピッチはどれも「高低型」であった。

#### 4回目長音指導（付録8）

練習は7回で、長母音の身ぶりを併用して語末長母音の練習を行い、指導項目は「はなそう」、「ただし」、「ぶんぼう」、「つかおうね」である。5回目に「蝶々」という4拍リズムのわらべ歌を導入している。

## 6章 誤用の改善率

### 「長母音・拗長母音の聴取誤用の改善率」

1カ月半に2回実施したが、長母音・拗長母音の語中位置および長音部のピッチ別における誤用の傾向および改善率について述べている。

まず、指導グループの改善率である。語頭位置における長母音の聴き取りが容易であることが、誤用の改善率100%、93.3%という数字からも伺える。一方、改善率の低い位置は、誤用の多い位置と一致している。それは語中位置の長母音、長音部のピッチが「低低型」（66.7%）、語末位置の長母音、長音部のピッチが「低低型」（84.2%）の場合である。

拗長母音の改善率は長母音と同様の結果になった。即ち、聴き取りが容易であった語頭に拗長母音がある場合において改善率も顕著で、最も高かった（80%、83.3%）。

次に、非指導グループにおける長母音の聴き取り調査結果である。長母音のどの位置でも誤用の増加がみられる。長音部のピッチ「低低型」の場合、語頭位置、語中位置、語末位置でも、誤用が増加している。語末は、誤用増加率が最も高い位置である。指導群と異なる点は、拗長母音において改善が見られたことである。

### 「長母音・拗長母音生成における誤用の改善率」

指導グループにおける語中位置及び語頭位置の長母音の誤用改善率は、語頭位置の長音の改善率 78.6%、語中位置の長音の改善率 100%と顕著であった。誤用が最も多かった語末位置の長音は、改善率も低かった。

非指導群の長母音の誤用と同様、拗長母音の誤答率と改善率には関連性が見られない。即ち誤用が最も少ない語頭（表 26、18%）では改善率が最も低く（表 27、27.8%）、二番目に誤答率が高い語中は改善率が最も高いという結果になった。

指導グループでは、聴取・生成が容易な部分は最大限に改善され、困難な部分は改善されにくい点が改めて確認された。すなわち聴取において語中および語末のピッチが低い「低低型」は、低い音が短く聞こえるという学習者の生理的な理由により聴取・生成が難しくなること、また、読み上げにおいて語末位置の長母音生成が困難なのは、単語内のエネルギーが語末で減少するという現象が関係しているということが確認できたとしている。

### 「聴取、読み上げ実験の平均誤用改善率」

非指導群の長母音の間違いが減少しておらず、逆に若干増えている。非指導群の拗長母音については間違いが 15%減っている。それに対し、指導群の長母音の聴解誤答率は 84%減少し、拗長母音の聴解誤答率は 47.5%減少した。非指導群の長母音の間違いが 27%減ったのに対し、指導群の長母音の間違いは 64%減少した。また、非指導群の拗長母音が 51%減ったのに対し、指導群の拗長母音の間違いは 94.6%減少した。

## 7章 結論

筆者は聴解調査を通して、グルジア語を母語とする日本語初級・中級学習者の長母音の聴取・生成に見られる誤用の傾向を明らかにしたが、その結果は以下の通りである。

### ①聴解調査の結果

- 1) 誤答率は、初級・中級学習者共に、長母音語中（低低・高低）、語末（低低・高高）、語頭（高低・低高）の順に高く、長母音の位置する音環境が誤答率に影響している。
- 2) グルジア語母語話者の日本語学習者には、長母音の聴取が一番難しく、特に、長母音部の末部のピッチが低い長母音語中（低低型）・長母音語末（低低型）という音環境において困難度が増している。

### ②生成調査の結果

- 1) 初級日本語学習者の単語読み上げ実験の結果、誤答率が最も高かったのは、長母音も拗長母音も語末位置であった。中級では誤用は減るが、拗長母音が語末に来ると初級と同様に誤答率が増加する。
- 2) 日本語の子音の中でも破裂音は最も緊張度が高いが、調音後は急激に弛緩するため、後続母音は十分な長さを維持するのが難しい。グルジア語の「k'tp`」放出音は、日本語の破裂音より強いため、日本語学習者の長母音・拗長母音の正しい生成を妨げていると考えられる。グルジア語の弱い強弱アクセントは、常に語頭に置かれており、放



出音の影響を更に強めると考えられる。

### ③指導の効果（結果）

長母音のみに注意を向けさせると言語の全体構造的性を損なう恐れがあるため、長母音指導のみでなく、促音、撥音などを含むリズム全体、アクセント、破裂音等、典型的な誤用の指導もふせて行ったとしている。指導項目に関する理論的な知識を与え、意識化したうえで、VT法を中心に練習を行っている。具体的な方法として、わらべうた、ログトム、身体リズム運動を用いて目標音を際立たせ習得を促した。

指導前及び指導後行った聴解・生成調査の結果では、指導群の誤用の改善率が顕著であることが分かった。指導群の聴解における長母音の誤用は84%、拗長母音は47、5%減少したが、非指導群の聴解における長母音の誤用は若干(2%)増加し、拗長母音は15%減少したに留まっている。

指導群の生成における誤用は長母音で64%、拗長音では96、4%減少したが、非指導群の長母音の誤用は27%、拗長母音の誤用は51%減少なのであった。非指導群も誤用がある程度減少しているが、その理由は1. 長母音の意識化（一回目の調査後、長母音の誤用を指摘した）、2. 日本語能力レベルが上がると共に、発音に自然さが増すためだと考えられるという2点をあげている。

## IV 論文の総合評価

### 「論文提出までの経緯」

筆者は、平成23年4月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了単位10単位を取得し、外国語（日本語）検定試験にも合格している。平成26年3月博士後期課程を満期退学している。

本論文は、言語教育研究科博士論文申請規定A日程により進められている。博士課程入学後から論文提出時までの業績は、学外の学会等の発表を含め計4本となる。完成論文発表会は、平成25年12月14日に実施され、論文は、平成25年12月22日に受理されている。審査委員による論文審査を平成26年5月2日に行い、審査の結果、全員一致で「合格」とし、続く、最終試験（口述試験）を、平成26年5月14日に実施し、審議の結果全員一致で「合格」と判定した。

### 1. 研究テーマの適切性・妥当性について

筆者はグルジアのトビリシ大学にて日本語教育に携わって来たが、グルジアにおける日本語の音声教育は、音声学的、教育学的見地から見て、非常に貧しいと言わざるを得ない状態である。日本語のネイティブが非常に少ないだけでなく、教師も必ずしも専門的知識とそれを使いこなすスキルも十分ではない。そういった日本語教育の環境を変化させたいという目的意識から研究テーマは始まっている。特に、「日本語らしさ」に関わるリズム聴取・

生成の研究と、音声指導法の確立は重要なテーマであり課題である。

本論文では、中心テーマを正しい聴取・生成が定着しにくい長母音に絞っている。長音は、日本語のリズムに関わる重要な音声要素である。日本語学習者にとって習得のもっとも難しい音声要素の一つであり、日本語らしさを獲得するためには必須の要素である。このテーマを研究の中心に据えたのは適切であり、妥当であると考え

## 2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

第2言語習得、音声的誤用に関する対照言語学、外国語教授法、音声指導法に関する先行研究や資料などを多く集め、内容を分析し、実験調査、実験授業の実施に役立てている。VT法の創始者ペタル・グベリナに関する文献が十分ではないが、原語がクロアチア語であり、その訳本もフランス語が多く、現実的でないことも事実である。

文献資料の使い方は適切であり論点も的確あるが、引用が多く、筆者自身の表現で論点を進めて行くことが望まれる。その他の点に関しては、全体的に適切であると考え

## 3. 研究方法の適切性・妥当性について

国内外の多くの先行研究、資料に基づいて研究を進めたことは、適切、妥当であると判断する。また、聴取・生成における音声上の誤用傾向を調査するにあたり、学習者にアンケートをとるとともに、簡単な音声学的知識を提供し、実験調査を実行している点、発音矯正を中心とした実験授業では、VT法を用いた指導群グループと従来の指導法（オーディオリンガルメソッドを中心に）を用いた非指導群に分けて発音指導を行い、VT法の発音指導法としての優位性を実証した点は、研究方法、手順として適切であり妥当であると考え

## 4. 論旨の妥当性

論文の論旨そのものは妥当であると判断する。

## 5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

全体の構成など大きな問題はないが、細かい日本語の表現に関して、文法的な間違いや、不適切な表現があり、また、VT法の専門用語に関しても、不適切な使い方があるため、加筆、訂正を求めた。

## 6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

1. 音韻論、音声学的観点からグルジア語と日本語を比較対照した研究は皆無であり、

音声指導の研究も進んでいない。そういった教育環境において、グルジア人日本語学習者の母語干渉の傾向を明らかにし、また、その解決策を提示し実践したのは、グルジアだけでなく、コーカサス諸国における日本語教育に十分貢献するものである。

2. グルジア人日本語学習者における長母音、拗長母音の音声上の誤用傾向は、長音／短音といった対立項のみの分析では適切な誤用分析は見いだせない。筆者は、長・短という持続時間に関わる、アクセント構造の違いや破裂音／放出音といった調音法の違いにも目を向けて、それらの音声要素が、相互に有機的に関連し合っているといった全体構造的視点から分析しており評価に値する。

具体的な誤用分析では、長母音（および拗長母音）が語末に位置し、ピッチも下がっている音環境では、長母音の短母音化が顕著であること、また、この傾向は他言語間の音声的誤用にも広く見られ言語の普遍的特徴であること、グルジア語のアクセントと放出音の干渉により、語頭の長母音（及び拗長母音）聴取・生成が難しいといった言語特有の特徴も見いだしたことは、今後の音声教育の重要な資料となり、大いに評価できるものである。

筆者の日本語による文献資料の読解力、論文作成における文章力は十分なものである。

VT 法に関しては、理論、実践にも精通しており、長年、トビリシ大学にて日本語の指導をしてきた経緯もあり、教育現場で十分に指導・矯正できると確信している。

また、文献資料収集能力、緻密で的確な調査方法、分析力など、論理的な研究を推し進める能力も備わっていると考える。当委員会は、ズビアシビリ・タマリ氏が、日本語の優秀な研究者、教育者として、発音指導のスペシャリストとして活躍することを期待するものであり、本論文は、博士論文の水準を満たしているものと判断する。

## VI 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、三委員全員が一致して学位申請者に対して、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。